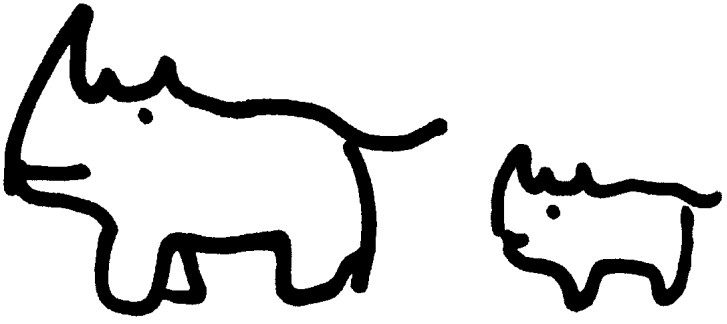
ぼくが動物に学んだこと

羽仁　進

ぼくが動物に学んだこと

羽仁　進



文化出版局

ぼくが動物に学んだこと

検印廃止

定価・六〇〇円

普通送料・一一〇円

昭和四十八年十月十日・第一刷発行

著者・羽仁　進

発行者・大沼　淳

発行所・文化出版局

東京都渋谷区代々木三ノ二二ノ一

郵便番号・一五一

電話・〇三(三七〇)三一一一

振替・東京一九五六七〇

印刷所・カバー　文化カラー印刷

本　文　大日本法令印刷

製本所・大口製本

(分)0095	(製)700140	(出)7368

© Susumu Hani 1973

万一乱丁落丁がありましたらお取替えいたします。

写真は２枚ともアフリカ・ウガンダでの著者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はじめに——野生教育と自然保護

ぼくは、子どものころから、動物が大好きでした。

一歳半ばごろから、とても仲よしのイヌができたそうです。考えてみると、これはなにも、ぼくだけのことではなくて、幼い子どもは、たいがい動物と仲がいいようです。人間の言葉をうまくしゃべれないうちから、動物とは、けっこう話が通じたりします。

しかし、ぼくは、もう少し大きくなってからも、動物の世界が好きで、少しは勉強もしました。これがはたして、しぜんにそうなったのか、親の配慮があったのかは、この本の中でも、母と議論をしていますから、読んでみてください。

とにかく、ぼくは、しばしば学校をサボってまで、虫や小動物のそばにすわり込んで、一日を過ごしました。学校で、いろんな動物の飼育係にもなりました。もちろん、家でも、いろんな生きものを飼いました。

はたして、こんなぼくの生きもの好きが遺伝したのかどうか、いまは、ぼくの娘が、動物に夢中になっています。海岸に住む母の家にいる一一匹のネコたち、そして自分の飼っている真っ白いネコ「鳥公」、そのひとりひとり（?）の個性に、彼女は限りない楽しみを見いだしているようです。ふられてばかりいるコステロ、仲よし兄妹のコポンとシマシマ、ゆったりしていて、やさしくて、大雄ネコのコゾ等々……。

ぼくは、仕事の関係もあって、外国へよく旅行しますが、いつ行っても、すばらしいのはアフリカです。アフリカの草原を走る動物たちを見るごとに、何か心の奥底にあるなつかしいものが、こみあげてくるようで、その魅力にはほとんど抵抗できないものを感じるほどです。

国際映画祭などに行くと、世界に名高いスターたちが、たいへんな宝石を飾り、見事なデザインの服を身にまとって、パーティに現われます。また、社交界に君臨する貴婦人たちのなかには、人工美の極致をいくような美人もいないわけではありません。

しかし、どんな美女の豪華な姿も、赤道直下の太陽を浴びて、キラキラと輝いているシマウマやキリンの肌の美しさの前に出たなら、とたんに色あせて、実に貧弱なものにしか映らないでしょう。

砂漠に近い乾燥した草原。その上を、まるで幻のように駆け抜けていくチーター。そのチータ

ーが、ふと、大木の下に憩った瞬間、柔軟な姿態の発散するムードは、胸がドキリとするくらい鮮やかです。チーターの姿におびえて、高く跳んでいくインパラ（カモシカ）の群れ。まるで、赤く輝く流星が、次から次に、ブッシュ（やぶ）の中に消えていくようです。

夜になって、テントの中で横になっていると、さまざまな鳥や獣の叫びを背景に、昼間みた強烈なイメージが、次から次に甦ってきます。いつの間にか眠りにおちると、夢は東京で見る夢の、何倍も華やかに繰り拡げられるのです。

こんな記憶のいくつかをたどってみると、ぼくは、人間を、いつもどこかで呼んでいる大自然の声を感じます。

いまはプラスチックや合金に囲まれて暮らしていても、人間は、けっして機械の一部ではありません。

この肉体をもつかぎり、人間は、あくまで自然の一部です。この事実は、どう否定しようもありません。

ふだんは、そのことを忘れている人間が、大自然の、最も素朴で、鮮烈なイメージに接したとき、ふっと浮かび上がってくるのは、みずからの心のふるさとの姿でなくて、何でしょうか？

このごろ、しきりに自然をたいせつにとか、自然保護教育などということがいわれます。それ

はそれでけっこうなことでしょうが、なんだか、ひどく観念的に、空しく響くのは、どういうわけでしょう。

それを、とくに強く感じたのは、東アフリカに旅して、「野生教育」というのが行なわれているのを、現地で知ったときです。

東アフリカの動物保護地で、小さな子どもたちに出会ったことがありました。アフリカ人特有の、丸い大きな目をして、茶褐色の肌を光らせた、六、七歳の子どもたちが二〇人ばかり、大きな一台の車に乗り込んで、出かけていきます。

「彼らも、見物に来ているのですか？」

と聞いたら、

「ええ、あれが野生教育ですよ」

なるほど、車の横に、東アフリカ野生教育と書いてありました。日本でいえば、修学旅行のような形で、野獣たちのほんとうの姿を見学しているわけです。

アフリカといえば、どこにでも野獣の満ちあふれている暗黒大陸と思っている人が、まだいるとすれば、それはまちがっています。アフリカ人でも、町に住む人はもちろん、農耕で生活している人も、野獣のことはほんとうによく知ってはいません。畑をつくるようになると、野生の動物は敵になり、姿さえ見れば、追い払おうとするのですから、その生活の実態はわからなくなる

のです。

東アフリカの各国政府は、森林や草原など、自然資源の保護に力を入れています。それは、たんにアフリカのためというよりは、地球全体にとってもたいせつな自然資源なのです。しかし、そのためには、まず、アフリカ人自身が、自然を理解し、愛する態度を身につけなければなりません。

よく、自然をたいせつに、という運動などのポスターを見ると、緑の森とか、青い空などが描かれています。とくに、日本人にとって自然というと、静かで美しい風景が、すぐ頭に浮かびます。しかし、ほんとうの自然というのは、動物がいなければ滅びてしまいます。大地の上に、多様な植物と動物が生きていて、その循環が、雄大な自然のリズムを生みだすのです。

自然をたいせつにするというのは、同時に、その自然の重要な一部である野生の生物をたいせつにするということでなければなりません。

しかし、同じ生きものでも、動物や昆虫となると、なかなか簡単に、たいせつにするというわけにはいきません。動物のなかには、人間に噛みついたり、刺したり、害をするものがいるから、つい、皆殺しにしてしまいたい、根絶やしにしてやりたい、という気持ちに駆られてしまうからです。

いままで、人類が歴史のなかでやってきたのは、憎い動物は殺して、おとなしい自然だけを観

賞しようというやり方でした。しかし、動物たち、昆虫たちがいなくなると、いつの間にか、森や川も滅びはじめます。こうして、いつの間にか世界の多くの国で、自然は姿を消してしまいました。

東アフリカでも、たとえば、ヒョウを目の敵にして殺したということがありました。ところが、ヒョウがいなくなると、それまでは、ヒョウにとられていたマントヒヒが、急にふえてきました。自然のバランスが崩れたのです。マントヒヒに畑を荒らされて困った人間は、今度は、マントヒヒを殺しはじめます。こうして、次々に具合いの悪いものを殺したり、邪魔だと思う木を切ったりしていると、いつの間にか地球が丸裸になってしまいます。

野生動物は、けっして悪魔ではありません。彼らには彼らなりの自然な生き方があるのです。その法則に逆らいさえしなければ、人間に害を与えるものではありません。これを、実地に子どもたちに学ばせようというのが、「野生教育」のねらいです。

小学上級から中学の年齢になると、ただ見学に行くだけではありません。広大な保護地に泊まり込んで、自然保護の仕事を手伝いながら動物を観察し、彼らの生活のドラマやユーモアを、肌に感じて知るのです。そのために、各地に子どもの宿泊できるキャンプがつくられています。

ぼくは、すっかり感心してしまいました。と同時に、日本の現状が、寂しく思われました。

選挙のたびに、各政党のシンボル・マークには、グリーンやブルーが自然讃美をうたい、都会

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

にふるさとを取りもどそうとか、あらゆる生命をたいせつにしようとか、偉い人たちは演説します。しかし、実際には、都会の子どもたちのほとんどは、生きものを飼うことを禁止されるような環境に住んでいます。

学校で教えられる自然保護も、結局は、目先だけです。動物に夢中になるような子どもは、余計なことをしていると叱られ、机の上の勉強ばかり上手な子がほめられます。

こんな現状では、教科書に書いてある自然観があいまいなのも、無理はありません。

生きものを殺してはいけないというけれど、たとえば、ハエやゴキブリは、どうするのでしょうか？　自然をたいせつにというけれど、魚や肉を食べてはいけないのでしょうか？

こんな疑問を子どもたちにだされても、大人にはなかなか答えられないのです。つまり、突っ込まれてみると、自然を見る目が、自分自身にも失われていることに気づくのです。

この本では、ぼく自身が、一人の動物好きの風変わりな子どもから、大人になっても、やはり動物が好きで、自然に興味をもっている、その間に体験したことを、いくつか書いてみました。

ほとんどすべての子どもたちが、一度は通り過ぎる動物好きの時期、それをたいせつにしてやることから、自然に対する新しい目をはぐくむことがスタートすると思います。ぼくのささやかな体験が、その一助にでもなれば幸せだと思います。

ぼくが動物に学んだこと・目次

はじめに――野生教育と自然保護……1
幼いころから……15
少年の日の武蔵野……15
サンショウウオのこと……23
動物と子どもたち――母・ぼく・娘の対話……26
ミミズクとロバ……36
小川の思い出……45
動物探検家の夢……48
動物園日記……53
夜明けの動物園……57
アフリカの大自然の中で……79
大自然の奏でる歌……79
夜の動物たち……87
ゾウの群れ……100

ハミシュ・サレへのこと……104
野生の群れを見る喜び……112
かぎりない自然の魅力……125
アフリカ人による自然保護……140
ナイロビの動物孤児院……156

自然と動物と人間と……161

サルと間先生……161
おサル天国――幸島……167
動物と人間のコミュニケーション……178
葛生の原人……181
自然・動物・人間……185
グウチのこと……197
アノネノネとネコ――母・ぼく・娘の対話……199
MIOと11びきのネコ……207
ネコの公園――ローマ……222

ウミガメとイグアナとイヌ……224
「かわいそうに」ということ……228
君子は庖厨を遠ざくべからず……233

装画・羽仁　進

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com